

「国際交流」ということは

レオ・ラヴデイ

六年前に、同志社大学の英文学科で教えるためにヨーロッパを出発した時、私はまだ、それが単に外国で新しい職につくということだけでなく、もっと深くてもっと偉大な事柄にかかわることになるのだということに、まったく気付いていなかった。時がたつにつれて、次第にわかってきたことだが、私は教師という仕事以外に「国際交流」というむずかしい、そして微妙な仕事に巻き込まれていたのである。

この「国際交流」という言葉であるが、たしかに今世紀のなかば頃から世界中の外交官や政治家たちによって広く使われるにつれて、それはうつろで浅薄なひびきをもつようになつたようである。ここで私は「国際交流」や「国際化」という言葉の意味をさぐってみたいと思う。こうした言葉はもっと深刻に受とめるべきだということを考えてみたいのである。

英語を母国語とする人々が「国際交流」という言葉を聞くととき連想するのは、外国の若いフォーク・ダンスのグループとか、歌手と

か、短期間のホームステイといったことである。つまり、多くの人はそれを一時的な文化のお遊びと見做すのである。「国際交流」という言葉で日本の皆さんが何を連想なさるのかわからないが、ひよっとするとその内容はこうした英語式の皮相なものに近いのではあるまいか。けれども、よその国の文化と接触するという喜びを発見するのは、要するに劇場とか家庭といった場での、限られた接触を通してであることはまちがいないことである。

他方、或る人々は「国際交流」という場合、進んでいわゆる開発途上国に出掛けていつて、医療、科学技術その他の分野で手助けをする若いボランティアの人々を思い浮かべるかもしれない。もちろんこれは非常に価値のあることであり、「国際交流」という言葉のまさに最も具体的な実現といえるであろう。はじめに述べた人々と較べると、それはもっと積極的で意識的な努力を含むからである。

「国際交流」という言葉を聞くととき、外国に長い期間住んで働いている人々のことを考える人はあまり多くないであろう。しかしよ

く考えてみるならば、文化的背景を異にする人々の間で真の理解が達成されるのは、実に、そのような毎日の接触を通してのみであることが明らかにになる。そういう状況においてこそ、両者の間で一層深く交流し、一層密接に理解し合う機会がもてるからである。

しかしながら、そのような状況ははじめに思ったほどには簡単なことでない。つまり、外国に住んでいる人たちと、外国人を自国に受け入れている人たちとの間には、さまざまな障害が存在するからである。こういう困難のことを論じてみることによって、「国際交流」という言葉のもつ複雑さに対する、より豊かな洞察を得ることができる。

第一は言葉の問題である。言語は交流を進めるためには重要な基本的道具であって、先ずは外国語が不完全であることから、あらゆる種類の障害が起こるのである。両者はどの程度まで正確に相手の言おうとしていることを理解できるであろうか？「国際交流」の分脈の中ではさまざまな理由からして、相手側の考えや欲求を正しく理解することは必ずしもたやすくはない。これは言葉の能力そのものが不十分なばかりでなく、思想や感情の表現の仕方が異ったものであり、相手の物の考え方や価値観がこちらに受け入れにくかったり、それについていけない、ということに由来するのであろう。しかし、両者にとって最も重要なことは、こうした言語的・文化的障害にもかかわらず、たがいに心を開き、信頼し合い、その信頼を示し合うように努めることである。これはむしろ、言うはやすく、行ふは難いことであるが、このような心構えなくしては国際交流の出発点もありえないといえるであろう。

第二は言葉とは別に、互いの行動をどのように理解するかという問題である。行動とはすなわち人々の顔や目の動かし方、体の動かし方、服の着方、物の食べ方、笑い方、あるいは沈黙の仕方といったことまでを含むのであり、恐らくそれは言葉以上に重要なものである。こうした、言葉をはなれた所で行動を理解するには、外国人の中で長期にわたって住みつき、彼らがどのように行動するかを調べ、その社会習慣や行動様式を学ぶために鋭意努力することが必要である。もちろん、これはただちに、そして容易に達成できることではない。しかし、この努力は続けなくてはならない——自国の文化と今住んでいる外国の文化の相違が許す限りにおいて。またその相違を理解した上で、その外国の社会にふさわしく、受け入れられるような仕方で行動できる限りにおいて。

しかしながら、異文化の人々を理解しようと努力する時に、その途上で、ただその国の言葉を話せるようになることは全く無関係な、多くの段階を辿ることになる。子供が大人社会のルールを習得していくのと同じで、外国の文化や様式の違いを学ぶ場合には、はじめはなかなかうまく行かないし、時には苦痛（「カルチャー・ショック」と呼ばれるもの）でもある。しかし、努力と意識的な生き方とをもってすれば、遂には外国社会のジグソー・パズル風の謎も解け、そこでの自分の立場と貢献できる場とを見出すことができるのである。少くとも、これが同志社大学において私が発見したと感ずることである。

これまでのところ、私は自分の日本での経験に照らして、主として外国文化の中に入っていった人の視点から「国際交流」を論じて

きた。次に私はその逆の立場、すなわち自分の国の中で、偶然にせよ自分の意志によるにせよ、外国人といわれる人々と接触している人について考えてみたい。この問題は、現代の日本ではやっている「国際化」、あるいはおなじみの「コミュニケーション」という言葉と関連する。

この第二番目の場合で面白いことは、二つのグループが、少くともはじめのうちは、相手を「外人」と見做すことである。そこで問題は、どのくらい長らく相手を自分たちとは毛色の違った、無関係な外人と見做し続けるのか、あるいはいかに早く、互いに人間同士だと認識するかということにある。互いに「外人」であるといううわべを超えて相手を見定めるようになるためには、多くの重要な要素がからんでくる。例えば、否定的な先入観や偏見である。自国の中で、障害者や老人といった、自分とは様子も行動様式も異なる人々にどれだけ出会った経験があるのか。こちらでは何を言っているのか聞き取れないほど著しい方言を使う人としやべったことがあるのか。自分とは全く異なった人生観をもつ人に会ったことがあるのか。こうした様々な経験があるのであれば「外人」と呼ばれる人間との間に意思を通じることが一層やさしいことなのである。

逆に、非常に限定された狭い範囲の交際しかないとしよう。つまり日本の状況がしばしばそうであるように、自分の同類である少数の人々としや交流していかないとしたらば、その場合にはもちろん、自分と異質の人々に共感を覚えることは難しいであろう。

国際交流において今一つ重要なことは、相方ともそれぞれが自身を理解していることと、外見は違っても、それぞれの共通

点を認識できるということである。それにはかなりの人生経験、つまり成熟が必要なのである。一般には主として若者が国際交流に適していると考えられているが、これはおかしいのではあるまいか。なぜなら、若者は概して自分とは異った人々と協力できるという自己認識と、自信とに欠けているからである。他方人々は年を取ると或る一定の様式に慣れ、新しいものに容易に適応してそれを受け容れていくことが難かしくなり、そのため狭い見方しかできず、融通もきかなくなり勝ちである。恐らく、国際的な交流ができるということは、結局のところ年齢には関係がないことで、それよりも心を開くという姿勢や、自分自身を進んで未知のものにさらしていくといった、精神の寛大さに関係することなのである。

今までのところ私は、すべての状況とすべての国家間に適用できるような、国際交流の一般的方法について書くこととしてきた。しかし最後に、国際交流の場での日本人の行動を考えてみたいと思う。

日本人と外国人との交流の中で最も深刻な障害のひとつは、「タマエ」と「ホンネ」という文化現象であり、それがいかに「ソト」と「ウチ」という状況に適用されるかということである。日本人は、日本の社会で日本人同士でさえも、話している相手がたとえ同じ会社と同じ課の人であるとか、同じ大学の同じ学部の人といった、ただちに自分の同類であると判断できる人とななければ、腹藏なくしゃべることは難しいということに私は気付いた。この「団体意識」がコミュニケーションの妨害となるようだ。だから外国人と向かい合った時、満足の行く意味深いコミュニケーションを持つチャンスが非常に少ないのである。だから、日本人は国際交流に参加

するためには、本当の「ソトノモノ」、すなわち外人に手をのばし、彼らに対して自分を表現できるよう、せいじっぱいの努力をする必要があると思うのである。

しかし、この国に六年間生活していて、私は、特にマス・メディアの分野で単なる「お飾り」とはちがった、国際的な接触に対する喜ぶべき態度の変化を認識した。多くの日本人が「白人」ばかりでなく東洋の隣人やもっと遠くの大陸や島々の住民をも含めた異文化の人々との交流の達成に喜びを見出し、国際交流にこれまでになく力を入れていることを私は確信する。日本人は世界中と良い関係を結ぶ能力を持っていると心から信じ、また彼らが良い意味でもてなしの心をますます持つように望むものである。

いづれにしても二十一世紀に入るまでには、技術の進歩を通して地球という共同体はさらに密接な関係に入るであろうから、ほとんどの日本人は外国との接触を経験し、国際交流に参加しなくてはならなくなるのは明らかである。今日、あちこちの地域で異国間の交流はすでに始まっている。たとえば学校では英語国から来た先生を通して、また外国からの交換留学生と同じ教室で学習することを通して、あるいは休暇には日本の外で働いたり勉強したりすることを通して。あるいは日本に居住したり日本国内を旅行したりしている外国人との接触の機会を通して——といったぐあいである。こうなるともうそれは「国際」間ではなく、まさに「人間」間の交流である。あなたもまたそれに参加しておられるのではなからうか？

(大学文学部助教役)

邦訳 北垣宗治 (大学文学部教授)

新島襄関係文献 (抄)

- | | |
|---|------------|
| 「新島襄全集」全十巻 (刊行中) | 同朋舎出版 |
| A. S. HARDY, LIFE AND LETTERS OF JOSEPH H. NESIMA | 同志社大学出版部 |
| 「同志社設立の始末・同志社大学設立の旨意——口語改記並原文——」 | 同志社 |
| 森中章光編「新島先生書簡集」正・続 | 同志社 |
| 同志社編「新島襄書簡集」——岩波文庫 | 岩波書店 |
| J・D・デイヴィス著・北垣宗治訳「新島襄の生涯」 | 小学館 |
| 「新島先生記念集」 | 同志社校友会 |
| 「明治文学全集 第四十六巻——新島・植村・清沢・綱島集——」 | 筑摩書房 |
| J. D. DAVIS, JOSEPH HARDY NESIMA | 同志社 |
| 森中章光著「新島襄片鱗集」 | 丁字屋書店 |
| 森中章光著「新島襄先生詳年譜」 | 同志社・同志社校友会 |
| 永澤嘉巳男編「新島八重子回想録」 | 同志社大学出版部 |
| 徳富蘇峰著「新島襄先生」 | 同志社大学出版部 |
| 魚木忠一著「新島襄——人と思想」 | 同志社大学出版部 |
| 岡本清一著「新島襄」 | 同志社大学出版部 |
| 渡辺実著「新島襄」 | 吉川弘文館 |
| 同志社社史史料編集所編 | |
| 「同志社百年史 通史編Ⅰ・Ⅱ」 | 同志社 |
| 「同志社百年史 通史編Ⅰ・Ⅱ」 | 同志社 |
| 和田洋一著「新島襄」 | 日本基督教団出版局 |
| 雑誌「新島研究」 | 同志社新島研究会 |

「国際交流」

―海外体験の中での出会いとその場をめぐる―

清水 宏

はじめに

一九八四年夏からわずか一年間のアメリカ滞在、今振り返ってみると、一番印象に残ることは人との出会いと、その出会いの場ではなかったろうか。さまざまな場での数々の出会いを通して得た体験は何ものにもかえがたいものであった。

もちろん、四十代にして初めての異国生活、久しく味わったことのない単身生活、英語の理解力不足、生活習慣の違い、その他すべての悪条件がこの身に重く、つらく、のしかかってきた。だが、これらの重荷をはねつけ、在外研究における当初の研究目的をまがりなりにも無事遂げられたのは、在外研究の地、ニュー・ヘイヴンでの、イエール大学での、さまざまな分野における人たちとの出会いに幸いにも恵まれたことに因るものと痛感する。

ここに、ある一つの出会いの場とそこで出会った人たちについて

触れてみたい。その中で、人を受け入れるアメリカ人のもつ開放性、陽気さ、親切さを、またその裏腹にアメリカ人の閉鎖性、戦闘的態度、いらだち、そして根強い偏見といった側面を同時に垣間見た気がする。『国際交流』の名の下に、種々提言されている中で、この拙文がいかほどの意味をもつのかおぼつかないが、その一端に触れることが出来るとしたら幸いである。

インターナショナル・センター

このセンターのお蔭で、渡航する以前からそれほど不安なくニュー・ヘイヴンの地に馴染み、早く生活のペースをつかめたと思う。このセンターは、主にイエール大学への外国人留学生の生活面での受け入れに大いに寄与している。もっとも、ニュー・ヘイヴンの町そのものが大学町として発展し、このようなセンターが存在するのにも、イエール大学の創立一七〇一年というみなが誇りとする長い歴

史からして肯づける。ちなみに、神学部を中心として日本から受け入れた留学生で同志社出身者が一番多いのもイエール大学であろう。そんな状況の中で、当センターに世話になった諸先輩が今なお滞在の折節について懐かし語られるのも、いかにセンターの存在が遠く異国から来た者にとって意味深い、ありがたいものであるかを如実に物語るものであろう。

では、センターの概要を紹介してみよう。有志による寄付と厚志に支えられ、奉仕団体として設立された当センターは現在二名のスタッフで運営されている。そのオフィスはイエール大学のキャンパスの一角にある。その設立の趣旨は各国から集まった学生、ファカルティ、研修員に国際的なコミュニケーションの場を提供し、それぞれのアメリカ体験をより意義あるものにするところである。その活動は大きく三つに分かれる。センターのパンフからそのまま引用させていただく。

- (一) *To orient* (the Host Family and Housing Aid Programs, a student residence, "Round-the-World Women");
- (二) *To inform* (the weekly programs, speaking engagements, our newsletter "The Globe", excursions, English conversation classes, the Speakers' Bureau);
- (三) *To broaden* the social life of the international student (Nativity dinners, the annual picnic and reception).

簡単にまとめると、(一) 紹介・斡旋 (二) 情報提供 (三) 社交の場の提供、これら三つの活動を基調にして当センターが今日に至り、うまく運営されているようである。なお、付属の施設として、インター

ナショナル・センター・レジデンスと呼ばれる宿泊と集会に供されるハウジングをもつ。

筆者がまず当センターでお世話になったことはホスト・ファミリーを紹介してもらったことである。もちろん、無償の奉仕に与かった。日常生活はほとんど大学のキャンパスで過ごすことになるのだが、やはりその土地の人々と接してみたいという気持から、渡航前に申し込んでおいたのである。宿泊の提供を受けず、現地の生活に順応していく際の良きアドヴァイザーといったところである。一般的にホストを引き受けられる家庭は、やはり余裕ある生活振りをうかがわせる。だが、一番感心させられたのは家族すべてがいくしみるとやさしさをもって他国の文化を理解しようとする態度であり、それが例えば日本の事に関心をもって接する彼らの態度にじかに伝わってくる。何十年もホストをされた家族の一員に国際関係学を専攻する女子大生が生まれるのも至極当然のように思われる。彼らは毎年新しいゲストをファミリーの一員として各国から受け入れ、自国の文化をその者に身をもって体験させ、また他国の文化を自ら吸収していく。そこから生まれる彼らの資質は他を心から受け入れる寛大さ、寛容さとなって現われてくる。それに対して、礼を尽し、恩を感じるのはいくらも当然のことである。ここに交流の一つの原点がある。ギリシア神話のフィルモンとボシスにつながる、また聖書の世界につながる人との出会いの原点である。

さらに、当センターでお世話になったことが他に二つばかりある。一つは、"English in Action" と呼ばれる英語のチューター制度である。センターには昼間英会話クラスがあるが、時間的に無理

だったのでこの制度を利用した。現在十名ほどのテュートレスが奉仕活動としてこの制度を維持している。半期二十五ドルの授業料を払い込む。英会話訓練を通して広くアメリカ文化を理解させようとするものだ。五十代半ばの気のいいS婦人を紹介された。週一度、お宅にお邪魔し、用意されたテキストを勉強していたが、余りにも内容が簡単すぎたため、いつのまにか筆者が持ち込んだ日本に関する新聞記事や雑誌記事について大いに議論するようになっていた。日常生活の中で日本紹介の記事やテレビ番組が結構見られるのには驚いた。これがきっかけでこのS婦人の家族の方とおつき合いをするに至った。旦那さまは弱冠三十一歳にして教授となられた物理学者であり、かつて東京での学会に出席されたとのことである。三人のお子さんを持つておられる。その一人のD君は目下イェール大学に籍をおいているが、休学中とのこと、それがS婦人の最も悩みとするところ。このD君をある日、日本レストランに誘った。彼は、専攻とする経済学がどうも自分に合わない、また、かつてドラッグをやったことがあり、今も体調がよくないんだ、ともらす。そのためか、自分の部屋に閉じこもっていることが多いと聞く。この事実を果たしてご両親はご存じなのだろうか。最後まで聞けなかった。この家族の住まいは閑静な住宅街の一角にあり、筆者のホスト・ファミリーであるK氏宅と道一つ隔てた向い側に位置していた。この道一つの隔たりが筆者には理解しがたい遠い距離を形づくっていたことが後で分かったのである。

もう一つ、センターでお世話になったのは、その広報紙“*The Globe*”を大いに利用し、その恩恵に浴したことである。その一面

を少し紹介してみよう。ちっと次のごとくである。

Marketplace

Language Exchange Wanted: Dutch for Japanese. Call 773-0062 (mornings or after 10 p.m.) Ask for Hiroshi.

Moroccan students interested in other Moroccans: Please contact Said Sebti at 785-4530 during the day.

German-speaking secretary requested for 10 hours a week in a well paid position. Contact 787-2763. Must have good secretarial skills, transcribe German from dictaphone.

この広報紙を通じて、国境を越えた友を求め合い、また同郷の人を探し求めるさまざまな顔をした多くの異郷の人々の存在を思い起こすのである。まさに『地球』の名にふさわしい役割をもつ広報紙である。

そんな中で、ヨーロッパの各国語を習いたくて、その旨この『地球』に掲示を出した。イタリア語、フランス語、オランダ語等である。キャンパス内でも、例えば指導教授を通じていい人を紹介してもらったりしたが、この広報紙のお蔭で、ランゲジ・エクスチェンジ(Language Exchange)という形をとり、いろんな人と出会うことが出来た。日本語を教え、希望の言語を習うのである。ここで日本語を教える難しさを初めて体験した。それ以来、努めて母国語に関心をもつようになり、古典から改めて読むようにしている。

しばらくしてフランス語を覚えてくれる、日本語に関心をもつ一人の婦人と出会うことが出来た。この人は先程のS婦人と友達であり、翻訳を業とするかたわら、センターの奉仕活動に熱心な婦人であ

あった。彼女は中国語を一年程勉強しており、日本語に入るのもそれ程苦にならなかったようだ。語学の天才といつてよい程、ヨーロッパの数カ国語をマスターしていた。とりわけ、フランス語、ドイツ語に堪能であった。第二次大戦後アメリカに渡って来られたと聞く。ご主人は化学者であった。このB婦人も親切な方であった。筆者が帰国する二カ月前に家族を呼び寄せた直後、子供がいきなり風疹に罹った。レッスン中であつた我々二人のもとに妻から電話があり、すぐ病院まで我々を車で連れていってくださったのも彼女であつた。

このように、センターを中心とした出会いの輪は広がつていった。狭い町、このセンターに係わる人たちはお互いによく知つていた。渡米の翌年四月にセンター恒例の一大イベントが開催される運びとなつた。インターナショナル・フェアである。世界の各国からやつて来た人たちのいわばお国自慢のフェアである。S婦人が実行委員の一人に選ばれた。B婦人も当日バザーを出すため、忙しく準備されていた。だが、K婦人はお年のせいか、筆者には驚く程冷静にこの催し物を受けとめていた。隣人同志であり、またセンターに係わり合う者であれば協力し合えばと思つた。この頃のS婦人は心なしか氣を荒立てられる時が多くなつた。週一度のレッスンにも支障をきたすようになった。

フェアの日がやつてきた。二日間の催しである。S婦人はにこやかにゲストの対応に余念がない。彼女の娘さんもニューヨークから仕事を休んで駆け付けてきた。ご主人もカメラを片手に奥さんの働き振りを温かく見守つていた。色とりどりの各国の催し物のコー

ナーが会場狭しと競い合つてゐる。その中で、B婦人がコーナーの一角でバザーを出していた。たしか手作りの銀細工の小物を展示していた。写真を一枚撮らしてもらおうと注文した。にこやかに仲間の人とそれに応じてくれた。その時、彼女の右の手の甲にどす黒い紫色の数字が痛々しく刻まれているのに気付いた。ファインダーを覗く自分の目も一瞬震えていた。ヴィッシーでの出来事であつたのか、アウシュヴィッツでの出来事であつたのか、聞くことは出来なかつた。この婦人こそ紛うことのない歴史の一証人であつたのである。このフェアの日にそれを堂々と晒されたのである。

ここにフェアのもつ意味が、またセンターの活動の意味が重くのしかかつてきた。それを運営する人々の微妙であつてしかし冷厳とした関係の中で他国の人を迎えている。アメリカ社会の縮図をここに見た気がする。その後、先程のD君が筆者にもらしてくれた。実は父親がユダヤ人であるが、母親はそうでない事実を。そのS婦人はまたご主人とルター派の教会に属していることをこのフェアの数カ月前のクリスマススの時に話されたことを思い出す。そのクリスマススの折りは、一人身の筆者を気付かつて、K氏宅もまたS氏宅もB氏家族と一緒にパーティに誘つて下さつた。また、帰国の折にも、それぞれ別れのパーティを開いて下さつた。センターを通じてこれらの人々に出会えたことにいくら感謝しても感謝しきれない思いで今日に至つてゐる。

おわりに

短かい滞在であつたが、他にさまざまな出会いの場に恵まれた。

指導教授を含むイエール大学そのものであり、また図書館である。一日の生活の中心の場であった。日曜日はキャンパス内のパテル・チャペルに赴いた。ここでの出会いは気持ち安らぐ思いであった。セクターで体験したさまざまな疑問もこの場での出会いによって安らげくふっとんだ。今日日本に帰って思うことは他を受け入れる大切さとその難しさである。街に氾濫する『国際交流』なる日本語がな

「有終館」満百歳

有終館の開館は、明治二十（一八八七）年十一月十五日だった。今年、昭和六十二（一九八七）年十一月は、創建一〇〇周年である。

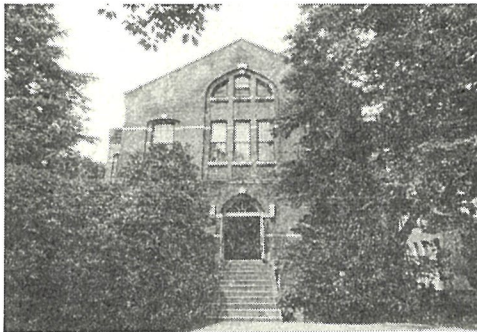
設計は宣教師のD・C・グリーン。施工者は昨年ようやく、京都の大工の棟梁三上吉兵衛であることが判明した。同志社礼拝堂（チャペル）も同様である。（『同志社大学広報』第73号参照）

周知のように、この建物は図書館（当初は書籍館と称した）として建築されたが、まだ図書の数も少なく、新島襄もこの建物で執務したと伝えられるが、教室として使われることが多かった。同志社政法学校（明治24年9月開校）もこれを教室とし、明治四十五年四月、専門学校令による同志社大学が開校してからは、全館教室になった。

大正六年、今出川通りの拡幅にともない、それまで南側にあった玄関が東側へ移され、同九年三月ようやく新図書館本館

ぜかむなく響くのは筆者のみであろうか。今こそ『交流』における精神的バックボーンを業として生かさなければならぬ時ではなからうか。すなわち、「いつくしみと愛をもって全心・全霊・全力を尽して神を愛するように隣人を愛せよ」という我々に与えられた使命に立返る思いである。

（女子大学助教授）



（現・啓明館）が竣工したので、教室になっていた旧図書館は、十一年二月に、ときの総長海老名弾正により「有終館」と命名された。

昭和三年十一月二十三日には、一階控室の火鉢の過熱が原因で、内部をほぼ全焼するという不慮の災害にあったが、武田五一の助言により、外壁はほぼ元のまま修復された。

有終館が現在のように総長室、学長室、事務室などとして使われるようになるのは、昭和二十四年十一月以降である。

（河）